

いじめ研究 : 海外と日本との比較

著者	桂田 恵美子
雑誌名	比較文化
号	5
ページ	167-180
発行年	1999
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000623/

いじめ研究：海外と日本との比較

桂田恵美子*

文献調査を通して、日本のいじめと海外のいじめが性質を同じくするものであるかどうかを比較検討した。その結果、いじめの定義、いじめの実態(広がり、時期、形態)、いじめ・いじめられっ子の特徴、家庭環境等は大体において日本も海外も変わりがないことが明らかにされた。ただ、日本のいじめ問題の方が海外のそれよりも多様化し、深刻化していると解釈できる面もある。また、いじめと家庭環境に関する日本の研究は理論的、観念的なものに限られ、海外のような実証的研究が、いじめ問題解決の具体的な手がかりを得るために必要であることが示唆された。

Through literature review, bullying problems in Japan and in foreign countries were examined to compare the similarities and differences. As a result, it is shown that bullying problems in Japan and in foreign countries are generally similar in definition, prevalence, time, types, and in the characteristics and family environment of bullies and/or victims. However, the results also suggest that bullying problems in Japan could be more severe in nature than in other countries. Further, it is suggested that more empirical research on bullies' and/or victims' family environments should be conducted in Japan to combat existing bullying problems.

問題

日本のいじめの背景には、「異質排除」の心理が多分に働いており(桂田, 1998)、その異質排除の心理は日本の社会風土と密接に関係している(深谷, 1995; 河合, 1997)。その為、いじめは日本独特の現象のように思われがちである。実際、筆者は小学生を子供に持つ母親から「外国にも日本のようないじめはあるのですか。」と問われたことがある。また、多賀(1997)は、アメリカに渡って自分の子供がいじめられたのは、アメリカ人からではなく、同じクラスにいる日本人からであったと報告している。しかし、多賀はアメリカにも日本と同様にいじめは存在し、アメリカでのいじめ対応策を紹介している。また、矢部(1997)もアメリカでのいじめに対する取り組みを紹介している。そうした海外での対応策が日本にもあてはまるかどうかは、海外のいじめと日本のいじめが性質を同じくするものかどうかの検討が必要である。そこで、本稿では海外のいじめに関する文献を調査し、海外のいじめについてどのようなことが言われているのか、日本のいじめと同じようなものなのかを調べて見ることにした。

文献調査

いじめの定義

いじめ研究の先駆者、ノルウェーの Dan Olweus(1993)は、いじめを以下のように定義している。「一人または複数の者による否定的行為にしばらくの間繰り返しさらされた時、いじめられたと

*桂田恵美子：宮崎国際大学比較文化学部比較文化学科 〒889-1605 宮崎県宮崎郡清武町加納 1405
Tel: 0985-85-5931, Fax: 0985-84-3396, e-mail: ekatsura@miyazaki-mic.ac.jp

いう。」「否定的行為」とは、誰かが意図的に他の人を傷つけたり、傷つけようとしたり、不愉快にさせたり、させようとした時のことであり、そのような行為は身体的接触、言葉によるものあるいは、嫌な顔を作ったり、卑猥なジェスチャーをしたり、人の意向に沿うことを拒否するなどの方法によってなされるものであると更に詳しく説明している。また、彼は、いじめは関係する両者に身体的・勢力的な不均衡がある場合であり、同等の力を有する者どうしのけんかと区別すべきであると言っている。つまり Olweus(1994)によると、「いじめ」は、(a)攻撃的行動または意図的に相手を傷つけようとする行為、(b)その行為はしばらくの間繰り返し行われる、(c)勢力の不均衡な人間関係内で起こるという三つの特徴を兼ね備えている。

Hoover & Hazler(1991)は、「いじめっ子とは、自分の不適切な感情を解消するために、言葉による、あるいは、身体的な攻撃を通して友達をたえず支配しようとする子供たちである」と述べ、更に、いじめっ子は自分より弱い友達を攻撃の対象とし、相手を選ばずに攻撃する普通のきかん気な子供と区別している。しかし、この Hoover & Hazler の定義はいじめがやつ当たりの要素が強いことを示唆していて、いじめの範囲を狭めるものである。いじめの原因は「自分の不適切な感情を解消するため」だけとは限定できないので、Olweus の定義の方が適切であるように思われる。実際、イギリス、アメリカ、カナダ、スペイン、ポルトガル、イタリアの研究者たちも Olweus の定義を採択している(森田, 1998)。

日本におけるいじめの定義としては、文部省がいじめの調査をした際に、「自分よりも弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものであって、学校としてその事実(関係児童生徒、いじめの内容等)を確認しているもの」(鈴木, 1995より引用)という定義を使っている。鈴木(1995)は、この文部省の定義や Olweus の定義を考慮したうえで、いじめを以下のように定義している。「いじめとは、ある特定の一人に、他の一人ないしは複数の者が繰り返し、あるいは、よってたかって、精神的、身体的苦痛を与え続ける比較的長期にわたる屈曲した攻撃行動(黙殺、無視を含む)を伴った、精神的または身体的圧迫である」(p. 135)。また、菅野(1986)は、「いじめとは、学校、もしくは学校の近隣、あるいは学校生活の延長上で、学級を中心とする各種の集団の多数派が少数者に対して、くりかえし多少なりとも長期間にわたって与える、差別的集合現象である」(p. 14-15)と定義している。菅野は「精神的、身体的苦痛」が一般的ないじめの定義に含まれていることを認めているが、「苦痛」は主観的なものであるという理由から定義に含めておらず、いじめは差別行為であり、人権侵害につながるとしている。

文部省のいじめの定義は、最後の「学校としてその事実を確認しているもの」を除けば、Olweus の三つの特徴を含んでおり、鈴木(1995)の定義は「勢力の不均衡」という点が明確ではないが暗に示されており、三つの特徴を含んでいると見なすことができる。菅野(1986)の定義は、「意図的な攻撃行動」という点が欠けていて、いじめが集団行為であるとしている点で、他の定義とは違っている。こうした

定義が出てくるのは、日本のいじめが多くの場合、集団で行われることを示唆していると考えられる。

海外のいじめの実態

いじめの広がり

Olweus(1993)は、1983-84年度のノルウェーの小・中学生の全国的な調査によると、全体の15%の生徒がいじめっ子あるいはいじめられっ子として、いじめに関与していると報告している。更に、いじめっ子もいじめられっ子も男子の方が女子よりも割合が高いが、特にいじめる側の報告では男女差が著しいという結果を得ている。Olweusと同様の質問紙を使用して行ったイギリスの小学生(低学年児の平均年齢：約9歳、高学年児の平均年齢：11.5歳)296人の調査では、約1/5の生徒が時々いじめられたことがあり、17.1%がいじめる側に時々加わったことがあると答えている。また、女子に比べて男子の方がいじめた経験もいじめられた経験も有意に多いという男女差も示している(Boulton & Underwood, 1992)。イギリスのシェフィールド地方で1990年に行われたより大規模な調査(中学生4135人、小学生2623人参加)によると、小学生の27%、中学生の10%が学期中に1-2回いじめられたことがあると答えており、その内10%の小学生、4%の中学生は一週間に一回または数回いじめられていると報告している。また、ノルウェーの結果と同様にいじめ経験における男女差も報告している(Sharp & Smith, 1991)。

Olweusのいじめの定義に基づいて子供たちにクラスがいじめっ子・いじめられっ子を指名してもらう方法を使ったイギリスの別の調査では、被験者となった158人の小学生のうち12.7%がいじめっ子(過半数のクラスメートからいじめっ子と指名され、いじめられっ子としての指名は33%以下)、17.1%がいじめられっ子(33%以上のクラスメートからいじめられっ子の指名をうけ、いじめっ子としての指名は半分以下)、4.4%がいじめっ子・いじめられっ子の両方(過半数のクラスメートからいじめっ子と指名され、同時に33%以上のクラスメートからいじめられっ子の指名をうけた者)であるという結果を得ている(Boulton & Smith, 1994)。また、Stephenson & Smithは、イギリスの小学校の先生を対象に質問紙調査を行い、その結果、約23%の子供がいじめっ子、あるいは、いじめられっ子としていじめにかかわっていると報告している(Boulton & Underwood, 1992)。

同様に、スウェーデンの小学校6-8学年の男子生徒約1000人を対象とした、先生の指名による調査では、顕著ないじめっ子、いじめられっ子は同じ割合で存在し(それぞれ、各学年の約5%)、あまり目立たない者をも含めるとその割合はそれぞれ約10%になると報告されている(Olweus, 1984)。オーストラリアでは、Slee & Rigby(1993a)が、7歳から13歳の412人の子供を対象に質問紙調査をし、男子では約10%、女子では約6%が一週間に一度の割合でいじめられているという結果を得ている。より高い年齢層(13-16歳)を対象にした調査においては、男子

では約11%がいじめっ子、13.7%がいじめの被害者、3.2%がいじめ・いじめられっ子の両方、女子では、それぞれ8.7%、9.8%、1.6%という結果であった(Rigby, 1994)。また、アメリカでは、Perry, Kusel, & Perry (1988)がクラスメートの指名によりいじめっ子、いじめられっ子を決める方法で、8歳から12歳の165人の子供を対象に調査した結果、その約10%が極度のいじめられっ子に分類された。

これらの世界各国の調査では、それぞれの調査対象となる子供の年齢や調査方法が違ふ為、各国のいじめの広がりを示す数値は微妙に異なっている。ここに紹介した調査では、イギリスが他の国よりもやや高い数値を示している。一般的には、世界のさまざまな国で少なくとも約10%の子供たちがいじめっ子、あるいはいじめられっ子として、過酷ないじめを経験しているということができる。そして、女子よりも男子が被害者あるいは加害者としてより多くいじめを経験していて、いじめは特に男子にとって深刻な問題であるといえる。

いじめ経験の時期

前述のノルウェーの全国的な調査では、2~9学年の生徒を対象にいじめがどのくらいの割合で起こっているのかを調べた結果、いじめの被害者は男女とも年齢が上がるに従って減り、2年生において被害者の割合が一番高く、9年生で一番低く、グラフにするときれいな直線を描いている。一方、いじめの加害者の割合は学年と共に増えるわけではなく、著しい男女差がある。男子では、5~6学年でいじめの割合が増え、7学年で減り、8~9学年で再び増える。これは、小学校の高学年になるといじめる側となり、中学校の低学年では再びいじめられる側になるからだ。Olweusは説明している。一方、女子はいじめた経験を報告する割合は男子より圧倒的に少なく、学年ごとの著しい変化も見られない。しかし、男子と同様、7学年(中学校の最少学年)でその割合がやや急激に減っている(Olweus, 1994)。

Boulton & Underwood (1992)によるイギリスの小学生の調査でも同じような結果が出ている。この調査での対象年齢はおおよそ8歳から12歳くらいであるが、年少者になればなるほど有意に高い頻度でいじめられた経験を持ち、反対に、いじめた経験は年長者になればなるほど有意にその頻度が増すという結果を得ている。このことは、年上の者が年下の者をいじめるといういじめの構造を暗示しているように思われる。

前項で述べたように、イギリスのシェフィールド地方での調査では、小学生の方が中学生よりもいじめられた経験が多い(27% vs 10%)という結果であり(Sharp & Smith, 1991)、これは上述した Olweus や Boulton & Underwood の結果と同じである。オーストラリアの6歳から16歳を対象とした調査でも、年少者が最も多くいじめの被害を報告し、小学校の最高学年である10~11歳の頃にいじめ被害の報告が減るという結果を得ている(Rigby & Slee, 1991)。その他の調査においても、対象となるのは専ら小学生・中学生であり、これらはいじめがこの時期に最も頻繁に起こっていることを意味している。

いじめの形態

Olweus のいじめの定義でも明らかなように、いじめは殴る・蹴るなどの身体的行為だけでなく、悪口を言うなどの相手に心理的ダメージを与える行為をも含んでいる。Olweus は、これらを直接的いじめ(相手に対して比較的オープンな攻撃)と間接的いじめ(社会的孤立や故意な仲間はずれ)とに分けている(Olweus, 1993)。そして、身体的ないじめは男子に多く、女子は悪口をいう、中傷する、うわさを広げる、友達関係を操作する(親友を奪ったりする)などのあまりはつきりとはわからない方法でいじめる、間接的な嫌がらせを多く行うなど、いじめの形態に男女差があるという。しかしながら、言葉やゼスチャーなどによるいじめは男子にとっても、最も良くあるいじめの形態であると報告している (Olweus, 1994)。

Sharp & Smith (1991)は、「悪口を言う」が一番良くおこなわれるいじめの形態で、子どもたちが述べたその他のいじめの形態には、ゆすり、身体的暴力、悪いうわさを広める、仲間はずれ、持ち物を壊される、脅される等があると報告している。彼らも Olweus と同様に、男子は身体的いじめや脅しを経験することが多く、女子は悪口を言ったり、仲間はずれにされたり、悪いうわさの被害者になったりなどの言葉によるいじめ、あるいは社会的ないじめを多く経験していると、その男女差を報告している。Yates & Smith (1989)の中学生を対象とした調査では、いじめを受けたと答えた生徒の71%が「からかわれただけ」、12%が「殴られたり、蹴られたりした」、11%が「からかわれもしたし、殴られ、蹴られもした」、わずか2%が「人からお金や持ち物を要求された」と報告している。そして、女子は「からかい」だけを経験することが多く、殴られたり、蹴られたりといういじめを経験しているのは男子に多いと報告している。オーストラリアの調査結果でも同様に、悪口を言われた子どもの割合の方が叩かれたり、押されたりした子どもよりも多く、そうした身体的いじめは女子よりも男子に多いという性差を報告している(Rigby & Slee, 1991)。その他、Perry 等 (1988)によるアメリカの調査でも、男女共に身体的いじめより言葉によるいじめを多く経験しているが、女子においてその差が大きく、女子は男子に比べて専ら言葉によるいじめを受けているとの結果を得ている。また、Boulton & Underwood (1992)は、いじめを経験していると答えた子どもの約58%は単にからかわれ、約33%は殴られたり、蹴られたりなどの身体的いじめを経験し、約10%がその他の方法、髪の毛を引っ張られたり、罵られたりなどのいじめをうけていると報告している。しかし、彼らはいじめの形態に有意な男女差がないという結果を得ている。

以上にあげたように、海外の多くの調査は言葉によるいじめ(悪口を言う、悪いうわさを広める等)が身体的いじめ(殴る・蹴るなどの暴力)より多いという一貫した結果を報告している。また、ほとんどの調査が言葉によるいじめは女子に多く、身体的いじめは男子に多いといういじめの形態上の男女差を報告している。

いじめの実態における海外と日本の比較

日本におけるいじめの広がりやマスコミでも良く取り上げられ、高頻度の発生率は周知の事実である。文部省の1997年度の調査結果によると、いじめの発生件数は前年度より減ってはいるが、小学校では5校に1校(21.5%)、中学校では2校に1校(47.8%)の割合でいじめが報告されている(1998年12月19日付読売新聞)。学校単位ではなく個人単位の、全国の小学校5年から中学3年生を対象とした最近の大規模な調査によると、1996年度の2学期という限定された期間中にいじめられたことがある者は、全体の13.9%であり、いじめたことがある者は全体の17%である(森田・滝・秦・星野・若井, 1999)。これらの数字は、前項であげた海外でのいじめの広がりやを示す数字と、かなり近いものである。しかし、過去の調査では、もっと高い数字を示している。毎日新聞が1994年に行った全国の小学校5年から中学校3年までの500人の男女を対象とした調査結果によると、29%が「いじめられた経験あり」、22%が「いじめた経験あり」と答えている(「総力取材いじめ事件」, 1995)。また、古市等(1986)は、細かいいじめ・いじめられ項目を提示し、それぞれ経験の有無を小学4年、6年と中学2年生に聞いた。その結果、一番高い経験率としては、男子のいじめが34.2%、女子のいじめが23.9%、男子のいじめられが33.1%、女子のいじめられが25.6%と報告されている。こうした数字を比べて見ると、現在では、日本でも海外でも同程度のいじめの発生率であるが、過去においては、いじめは海外よりも日本においてより広範囲に広まっていたといえる。このことは、いじめは世界共通の現象であるが、日本のいじめは海外のそれよりも根が深いことを示唆しているように思われる。

日本のいじめの発生件数では、小学校よりも中学校でより多く、特に中学1~2年がピークとなっている(「総力取材いじめ事件」, 1995)。しかし、古市等(1986)の調査結果では、いじめの平均値は小6で有意に高く、小4と中2では有意差はないが、いじめられの平均値は学年とともに有意に低下している。そして、いじめ・いじめられを合計すると、小学生の方がいじめを経験している率は高いといえる。こうして見ると、日本におけるいじめは、発生件数では中学校の方に多いが、個人が経験した割合で見ると小学校時の方が多。つまり、中学になるといじめを経験する者が限られてきて、経験する者は何度も経験するということを表していると思われる。一方、海外の調査結果では、小学校時代には被害者としていじめを経験する者が多く、中学生になるといじめる側としていじめを経験する者が増え、どちらかと言えば、小学校時代の方がいじめの発生率は高いと報告されている。こうして見ていくと、最も頻繁にいじめを経験する時期において日本と海外との間に多少のずれはあるものの、いじめが小・中学生という時期における問題であるという点で共通している。

いじめの形態については、前項で紹介したように海外では大きく直接的いじめ(身体的暴力等)と間接的いじめ(言葉による嫌がらせ等)に分けている(Olweus, 1993; Sharp & Smith, 1991; Boulton & Underwood, 1992)。一方、日本では、森田・清水(1986)の「心理的いじめ型(悪口、仲間はずれ、無視

等)」「心理的ふざけ型(持ち物を隠す、無理やり嫌がることをする等)」「物理的いじめ型(身体的・物質的被害を与える)」「物理的ふざけ型(着ているものを脱がす等)」の4つへの分類が著名である。そして、森田・清水は小・中学生を対象とした調査で、心理的いじめ型、心理的ふざけ型、物理的いじめ型、物理的ふざけ型の順で発生認知率が高いという結果を出している。また、いじめの形態における性差は日本でも報告されていて、海外の調査結果が示しているように、日本でも、心理的いじめは女性が多く経験し、身体的攻撃やゆすりなどは男性に多く経験されている(深谷, 1996; 桂田, 1998)。

こうして見ていくと、日本ではいじめの形態がより細分化されていることがわかる。しかし、心理的いじめが物質的いじめよりも多く経験されているという点では、日本でも海外でも変わりがなく、経験するいじめ形態の性差も世界共通の現象である。

いじめ・いじめられっ子の特徴

Olweus (1984; 1993; 1994)は、一般的ないじめっ子の特徴として1)暴力や暴力の行使に対して肯定的な態度を持っている、2)先生、親、兄弟に対しても攻撃的である、3)強い衝動性や支配欲を持つ、4)いじめられている子に対して共感性が乏しい、4)身体的にどちらかといえば強い、5)クラスメートからの人気は普通である、6)自分自身に対して肯定的な態度を有する等をあげている。オーストラリアの Rigby & Slee (1993)も、12歳から18歳の男女を対象に行った調査で、いじめっ子は他の子に比べて、自尊心(Self-esteem)が低いわけではないが、他の子どもより幸福感が低く、学校が嫌いとする者が多いという結果を得ている。男子についてだけであるが、いじめる傾向とクラスメートからの人気は正の相関関係があり、先生からの人気とは負の相関関係があるという調査結果も出ている(Slee & Rigby, 1993b)。また、彼等はいじめっ子・いじめられっ子の性格を調べるために、7~13歳の男子に Eysenck の性格テストを行った。そして、いじめっ子はいじめられっ子や普通の子よりも、精神病的要素(factor of psychoticism)が有意に高いという結果を得た。つまり、いじめられっ子や普通の子に比べて、いじめっ子は孤独を好み、衝動的で、他人に対して敵対心を持っていて、協調性に欠け、社会的感受性や根気に欠け、不安感や劣等感が欠けているという特徴を強く持つということが出来る(Slee & Rigby, 1993a)。また、別の調査では、男女共に、いじめる傾向と抑うつ傾向(depression)に相関性があることが明らかにされている(Slee, 1995)。

一方、いじめられっ子の特徴としては、1)態度や行動において攻撃的ではない、2)一般的に暴力に対して否定的である、3)不安が強く、自信がない、4)慎重で感受性が強く、おとなしい、5)自尊心が低く、自分自身を否定的に見ている、6)学校では孤独で、放って置かれている存在で、良い友達が一人もいない、7)男子では一般的に他の子よりも身体的に弱い等があげられている(Olweus, 1984; 1993; 1994)。いじめられっ子の自尊心が低いという特徴は他の研究者も指摘してい

る(Rigby & Slee, 1993; Slee & Rigby, 1993b)。また、彼等は、いじめられっ子は友達が少なく、友達から人気がないという自己認識を持ち、学校では他の子よりも不幸であると感じているが他の子よりも強く学校嫌いというわけではないと報告している(Rigby & Slee, 1993; Slee & Rigby, 1993b)。その他、男子では、いじめられっ子は他の子に比べて、運動能力が劣っているという自己認識を強く持っていて(Boulton & Smith, 1994)、男女共に、いじめられっ子は抑うつ傾向(depression)が強く、学校ではより不幸に感じていると報告されている(Slee, 1995)。

いじめっ子・いじめられっ子の家庭環境

Olweus (1993; 1994)は、子どもが攻撃的な反応パターンを持つようになるには子どもの気質だけでなく、家庭環境も多分に影響を与えていると述べている。彼は、あまりにも愛情・保護の少ない家庭やあまりにも自由放任の家庭に育った子どもは攻撃的性格パターンを持つようになること述べている。Oliver, Oaks, & Hoover (1994)は、いじめっ子の家庭の特徴を以下のようにまとめている。1)子どもの世話をする主要人物が子どもの生活にほとんど係わらず、冷たい情緒環境である、2)きちんとした家族の規則がなく、時々矛盾した規則を持ち出し、攻撃行動に対しておおらかである、3)地域社会から孤立した家族である、4)両親の衝突や不和がめずらしくない、5)攻撃行動を奨励し、非攻撃行動や向社会的行動を罰するような躰をしている、6)親の支配力が強く、子どもに対して激しい体罰を与えたり、激しい癪癢をおこす。

いじめをとりまく家族関係を調査したイギリスの実証的研究でも、いじめっ子、いじめられっ子の家庭環境は普通の子と違っていることを示している。この調査では、8~11歳の193人の子どもをクラスメートの指名により、いじめっ子、いじめられっ子、いじめ・いじめられっ子の両方、対照群に分け、各グループの家庭環境を比べた。その結果、いじめに関与している子(いじめっ子、いじめられっ子、その両方)は、父親不在の家庭に多く、いじめっ子の家庭は一般的に家族の結合力が弱く、特に兄弟姉妹との結合が弱いという特徴を、いじめ・いじめられっ子の両方は、家族のほかのメンバーとの関係が弱く、自分自身にしか関心がなく、親の養育方法が拙いと見ている者が多いということが示された(Bowers, Smith, & Binney, 1994)。また、オーストラリアの11~16歳の1012人を対象とした調査でも、いじめと家庭の精神的健康度は負の相関関係にあることが報告されている(Rigby, 1993)。精神的に健康な家庭とは、a)両親という結合したサブシステムのもとに家族の各々が個を確立していて、お互い柔軟な関係を持つ、b)愛情表現の幅が広い、c)家族のメンバー間で直接的ではっきりしたコミュニケーションがある、d)民主的な躰をしている、e)道徳的規範の価値観が親から子へ伝えられている、f)個を確立した上で、外部システムと柔軟な関係を持っている家庭である。つまり、いじめっ子はこのような特徴が乏しい家庭の子どもに多く、いじめに関与しない、向社会的行動をとる子どもはこうした特徴が強い精神的に健康な家庭

の子どもであるということである。また、父親不在の家庭においては、いじめっ子は母親に対してあまり肯定的ではないという結果を報告している。

一方、いじめられっ子の家庭環境は、家族の結合力や情緒的緊密さという点では過度に係わり合いが強く、癒着(enmeshed)した家族関係という特徴を持っている(Oliver, Oaks, & Hoover, 1994)。Bowers 等(1994)も、実証的研究の結果、いじめられっ子は両親や兄弟姉妹と親密な関係にあり、その親密度は癒着した家族構造(enmeshed family structure)と言える程であると述べている。また、Rigby (1993)は、女子のいじめられっ子は家庭があまりうまくいっていない、母親との関係があまり良くない傾向にあるという結果を報告している。しかし、男子のいじめられっ子は、母親と住んでいる場合に限り、不在の父親との関係があまり良くないことが多いと報告している。

以上に述べたように、海外のいじめの研究では、いじめと家庭環境が大いに関係していて、いじめ側の子といじめられる側の子の家庭はそれぞれ異なった特徴をもつことを示している。一般的に言って、いじめ側の子の家庭は、親が子どもにあまり関心がなく、極度に厳しい躰をおこなひ、家族のメンバー間の関係も薄く、両親が不仲で、所謂あまり良くない家庭である。一方、いじめられる側の子の家庭は、家族のメンバー間の関係が過度に強く、癒着した家族(enmeshed family)で特徴づけられる家庭である。

いじめ・いじめられっ子の特徴とその家庭環境における海外と日本の比較

日本のいじめ・いじめられっ子の心理的特徴についての研究としては、古市等(1986)が、いじめっ子、いじめられっ子、いじめ・いじめられっ子、局外児の4タイプにわけて、その特徴をまとめている。この調査では、小学校4年、6年、中学校2年の男女合計1920人を対象に、いじめ・いじめられ経験を項目別に問い、それぞれの生徒の性格検査、適応・不適応をしらべるテストを行った。その結果、いじめっ子は、社会的外向性が強く、協調的で、自尊心が高く、非抑うつ的で、家庭や学校にも適応している。ただ、欲求不満耐性が低い傾向にあることが判明した。また、いじめられっ子は、非協調的で、神経質、劣等感が強く、抑うつ的、自尊心や欲求不満耐性が低く、反抗傾向や被圧迫感が強く、家庭や学校での不適応が見られるという結果を得た。更に、いじめ・いじめられっ子はいじめっ子といじめられっ子の両方の悪い特徴を兼ね備え、局外児には否定的な特徴は見当たらないという結果を得ている。この結果から、古市等は、いじめっ子は比較的欲求不満耐性が低く、衝動的な傾向があるが、著しい性格の特徴や不適応傾向を持つとはいえないと述べている。また、中学1~2年生348人を対象とした別の調査(古市・余公・前田, 1989)では、生徒を被害者、被害・加害者、中心的加害者、追従的加害者、観衆、仲裁者、傍観者に分け、その性格テストを行った。そして、以下のような結果を出している。被害者は内向的で劣等感が大、被害・加害者は攻撃的、非協調的で劣等感大、加害者は攻撃的、非協調的で劣等感小、観衆は攻撃的、仲裁者は外向

的で協調的、傍観者 A(次のいじめでは、仲裁者になりたいと答えた者)は、非攻撃的、協調的で劣等感小、傍観者 B(次のいじめでも、再び傍観者でいると答えた者)は特徴なし、傍観者 C(次のいじめでは、どのように行動するかわからないと答えた者)は非攻撃的である。また、適応傾向の調査結果は、被害者群は級友との関係で、加害者群と観衆群は教師との関係で問題があることを示している。

これらの研究結果を前項でまとめた海外の結果と比べて見ると、いじめっ子の攻撃性や衝動性非協調性(日本では中学生のみで報告されている)は共通する特徴である。また、いじめっ子の自尊心は低くはないという点でも同じである。いじめられっ子については、劣等感が強い、神経質(感受性が強い)、自尊心が低い、抑うつ傾向、学校不適応等の特徴は共通している。こうして見ると、日本のいじめっ子もいじめられっ子も海外のも大体同じ特徴を持つといえる。しかし、いじめっ子に関しては、海外の研究で否定的な特徴を報告するものが日本より多いように思われる。例えば、共感性が乏しい(Olweus, 1984; 1993; 1994)、幸福感が低く、学校嫌い(Rigby & Slee, 1993)、抑うつ傾向(Slee, 1995)など。日本では、どちらかと言うと、いじめられっ子に否定的特徴が多く報告されている。

いじめと家庭環境については、日本の多くの研究者もいじめの背景に家庭環境があることを示唆している。例えば、詫摩(1995)は、いじめを止める力として働く子どもの共感性や正義感は家庭や社会で習得されるものであり、家庭で愛されていない子どもは、この共感性が育たないという。更に、彼は、いじめっ子もいじめられっ子も社会の習慣や生活のルールを教えられておらず、家庭の教育機能の低下がいじめをこれだけ氾濫させた一つの理由であると言う。また、河合(1997)は、物質社会により家族関係が稀薄化し、いじめっ子もいじめられっ子もいじめから脱け出す緒となるべき心のつながりを持っていないと述べている。土居・渡辺(1995)は、いじめの加害者は、意識しているかどうかは別として、ある種の妬みを持っているという。そして、その「妬む」というのは人間が持って生まれた感情であるけれども、育ち方によって妬みが強く発達する人とそうでない人がいて、甘えられるところがある人はあまり妬まないという。更に、外見的には何の問題もない普通の家庭に育った子が何故陰湿でしつこいいじめをするのかについて、ある教育者は、そういう家庭では夫婦関係が破綻している場合が多く、子どもは両親のけんかや口論にさらされ、すさんだ空気を絶えず吸わされ、家庭で満たされない思いを社会で吐き出すのだと述べている(有地, 1993 より引用)。

愛情がなく、家族関係が稀薄な家庭、両親の不和が絶えない家庭など、あまりうまく機能していない家庭にいじめっ子が出やすいことが、日本でも海外でも言われている。家庭環境はいじめ問題を解決するために、無視できない大きな要素であることは、日本の研究者も海外の研究者も認めるところである。しかし、その研究を比べてみると、海外では、実証的研究により具体的な家庭の特徴を究明し、示唆に富むものである。一方、日本の研究はすべて理論的、観念的であり、海外の

ような実証的研究はほとんどない。その為、今一つ説得力に欠ける。今後、日本で多くの実証的研究が望まれる。

考察

本稿では、海外で報告されているいじめが日本のいじめと性質を同じくするものかどうかを調べるために、海外と日本のいじめに関する研究の文献調査をし、比較検討した。

いじめの定義は、海外においては、Dan Olweus の定義が広く認められており、多くの研究者がその定義に基づいて各々の研究を行っている。日本の文部省の定義も、Olweus の言う三つの特徴を兼ね備えているという点で、ほぼ同じであると言える。

いじめの実態については、いじめの広がり、いじめ経験の時期、いじめの形態に焦点をあてて調べた。その結果、いじめは日本だけで起きているのではなく、イギリス、アメリカ、ノルウェー、スウェーデン、オーストラリアなど、世界の各国においても良く見られる問題であることが明らかであった。それぞれの調査方法や対象年齢が違うため、正確なことはいえないが、調べた文献からは、過去においては、日本の方が海外の国々よりもいじめ問題が頻繁に発生していることが示され、いじめは日本独特の現象と思われるのも無理のないことなのかもしれない。しかし、現在は、日本におけるいじめの発生率はいくらか減って、海外のそれとほぼ等しい。いじめの時期についていえば、小・中学校時代に頻繁におこるという点では世界共通であるが、海外では、どちらかと言うと小学校時代により頻繁にいじめが発生しており、一方、日本では、どちらかと言うと、中学校で頻繁にいじめが発生している。古市(1986)は、年少児に見られるいじめ・いじめられは児童間の相互的攻撃行為(けんか)といった色彩が強く、年長児(中学生)のそれは、本来の意味でのいじめ・いじめられということになると述べている。また、他の研究でも年齢が高くなるにつれていじめの形態が、集団無視や使い走り等ゲーム的なものから、脅しや暴力等の非行的なものへ変わっていくことが報告されているので(深谷, 1996; 桂田, 1998)、いじめが最も頻繁に起こる時期の海外と日本との違いは、日本のいじめが海外のいじめよりも深刻な問題であることを示唆しているのかもしれない。また一方では、いじめが最も頻繁に発生している時期の違いは、日本と海外の子供たちの精神的発達速度の違いを示唆しているのかもしれない。全世界的に起こっているいじめは、子どもの発達過程のある一時期で起こる普遍的な問題であるとするならば、そのピークの違いは単に日本の子供の精神的発達速度が海外の子供たちより遅く、そのピークが遅れるということなのかもしれない。はっきりした説明は今後の研究課題である。

いじめの形態については、海外と日本の間に顕著な違いはなく、どちらかと言えば似たような結果が報告されている。日本でも海外でも暴力などの身体的いじめよりも、言葉による心理的ないじめの方が多く、身体的いじめは男子に多く、女子は心理的いじめを経験することが多いとい

う共通の結果が出ている。ただ、いじめの形態を分類する際に、日本の方が細かく分けている。いじめの形態に関する詳しい海外の研究は見当たらないので、厳密には結論づけることはできないが、いじめの形態が日本でより細分化されていることは、それだけ日本でのいじめが多様化しているということを表しているのかもしれない。また、その細分化した形でとらえられている日本のいじめは、それだけ深刻な問題として社会で受け取られていると言える。

海外のいじめ研究は、いじめっ子・いじめられっ子の特徴やその家庭環境について究明しているものも多いので、本稿ではそうした項目についてもまとめてみた。日本のいじめっ子・いじめられっ子も海外のいじめっ子・いじめられっ子も似たような特徴を持ち、いじめっ子は攻撃的、衝動的、非協動的などで特徴づけられ、いじめられっ子は強い劣等感、神経質(感受性が強い)、自尊心が低い、抑うつ傾向、学校不適応等で特徴づけられる。

いじめと家庭環境の関係についても、海外と日本では根本的には同じことが言われている。一般的に、いじめっ子の家庭はどちらかというと、家族の人間関係が稀薄で、両親が不和で、親の躾や養育法が拙いなどの特徴を持つ家庭である。一方、いじめられっ子の家庭は、家族の人間関係が過度に緊密で、「癒着した家族(enmeshed family)」で特徴づけられる。こうした特徴は、海外では実証的研究によって裏づけされているが、日本では、この種の研究は理論的・観念的なものに限られ、実証的なものが少ない。そのため、いまひとつ説得性に欠ける。どのような家庭環境や躾がいじめっ子やいじめられっ子を生み出すのかを明らかにすることは、いじめ対策の具体的な手がかりとなり、その為にも実証的研究は必要である。しかし、そのような研究は家庭の協力なくしては不可能であり、日本の家庭の閉鎖性を考えると、その困難さも想像できるが、今後日本の研究者が挑戦して行かなければならない方向である。

この文献調査の結果、いじめは世界共通の現象であるが、日本のいじめ問題の方が海外のそれよりも多様化し、深刻化しているといえる。相互依存(interdependence)や人間関係を重要視する集団主義(collectivism)文化、日本では、個人主義(individualism)の強いアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの国よりも(Markus & Kitayama, 1991; Triandis, McCusker, & Hui, 1990)、「仲間はずれ」や「無視される」などのいじめが被害者にとっては大きな打撃となり、加害者にとっては大きな効果を望める手段となる。そのため、「異質排除」や「妬み」の要素の強いいじめ(桂田, 1998)が日本においてより深刻な問題となることは容易に理解できる。しかし、いじめは日本だけで起こっている現象ではないことも明らかで、いじめの内容としては共通するところも多い。海外の多くの国で、いじめに対する様々な介入策が実践されており、その効果も報告されているが(森田, 1998)、日本での組織的ないじめ対策、介入策の報告はほとんどない。海外で試みられ、成功をおさめているいじめ対策法は日本でも試してみる価値はあると思われる。

ここで紹介した世界各国のいじめ研究は、それぞれの調査方法や対象年齢などが異なっているため、正確な意味でのいじめ問題の国際比較という点では、やはり限界がある。例えば、筆者はい

いじめ経験者のインタビューや手紙からなる「ジャンプいじめりポート」の内容分析を試みた際、いじめの理由の一つとして「異質排除」の心理を指摘した。その表れとして、「仲間はずれ」「無視」「意図的にパートナーにならない」などのいじめの形態が高い頻度で報告されていた(桂田, 1998)。しかし、同じことが海外のいじめでも見られるのかどうかは、この文献による比較からは明らかではない。より正確な国際比較のためには、同じ方法を用いた実証的な異文化間研究(Cross-cultural study)が必要であると思われる。

引用文献

- 有地亨. (1993). 家族は変わったか. 東京：有斐閣.
- Boulton, M. J., & Smith, P. K. (1994). Bully/victim problems in middle-school children: Stability, self-perceived competence, peer perceptions and peer acceptance. *British Journal of Developmental Psychology*, 12, 315-329.
- Boulton, M. J. & Underwood, K. (1992). Bully/victim problems among middle school children. *British Journal of Educational Psychology*, 62, 73-87.
- Bowers, L., Smith, P. K., & Binney, V. (1994). Perceived family relationships of bullies, victims and bully/victims in middle childhood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 11, 215-232.
- 土居健郎・渡辺昇一. (1995). いじめと妬み：戦後民主主義のおとし子. 東京：PHP 研究所
- 深谷和子. (1995). 学校と地域における人間環境の破壊—「いじめ」問題の発生を例にして日本家政学会誌, 46, 697-701.
- 古市裕一・岡村公恵・起塚孝子・久戸瀬敦子. (1986). 小・中学校における「いじめ」問題の実態といじめっ子・いじめられっ子の心理的特徴. 岡山大学教育学部研究集録, 71, 175-194.
- 古市裕一・余公俊晴・前田典子. (1989). いじめにかかわる子どもたちの心理的特徴. 岡山大学教育学部研究集録, 81, 121-128.
- Hoover, J., & Hazler, R. J. (1991). *Bullies and victims. Elementary School Guidance & Counseling*, 25, 212-219.
- 桂田恵美子. (1998). 「ジャンプいじめりポート」内容分析, 比較文化(宮崎国際大学研究紀要), 4, 149-161.
- 河合隼雄. (1997). 子どもと悪：今ここに生きる子ども. 東京：岩波書店.
- 公立小、校内暴力 1 3 0 0 件. (1998, December 19). 読売新聞, p. 1.
- 毎日新聞社会部編. (1995). 総力取材いじめ事件. 東京：毎日新聞社.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 森田洋司. (総監修・監訳). (1998). 世界のいじめ：各国の現状と取り組み. 東京：金子書房.
- 森田洋司・清水賢二. (1986). いじめ：教室の病い. 東京：金子書房.
- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一. (編著). (1998). 日本のいじめ：予防・対応に生かすデータ集. 東京：金子書房.

- Oliver, R., Oaks, I. N., & Hoover, J. H. (1994). Family issues and interventions in bully and victim relationships. *The School Counselor*, 41, 199-202.
- Olweus, D. (1984). Aggressors and their victims: bullying at school. In N. Frude and H. Gaul (Eds.) *Disruptive Behaviour in Schools*. London: John Wiley & Sons, Ltd.
- Olweus, D. (1993). Bullies on the playground: The role of victimization. In C. H. Hart, (Ed.) *Children on Playgrounds: Research Perspectives and Applications, SUNY series, Children's Play in Society*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Olweus, D. (1994). Annotation: Bullying at school: Basic facts and effects of a school based intervention program. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 1171-1190.
- Perry, D. G., Kusel, S. J. & Perry, L. C. (1989). Victims of peer aggression. *Developmental Psychology*, 24, 807-814.
- Rigby, K. (1993). School children's perceptions of their families and parents as a function of peer relations. *The Journal of Genetic psychology*, 154, 501-513.
- Rigby, K. (1994). Psychosocial functioning in families of Australian adolescent schoolchildren involved in bully/victim problems. *Journal of Family Therapy*, 16, 173-187.
- Rigby, K., & Slee, P. T. (1991). Bullying among Australian school children: Reported behavior and attitudes towards victims. *Journal of Social Psychology*, 131, 615-627.
- Rigby, K., & Slee, P. T. (1993). Dimensions of interpersonal relation among Australian children and implications for psychological well-being. *The Journal of Social Psychology*, 133, 33-42.
- Sharp, S. & Smith, P. K. (1991). Bullying in UK schools: The DES Sheffield bullying project. *Early Child Development and Care*, 77, 47-55.
- Slee, T. P. (1995). Peer victimization and its relationship to depression among Australian primary school students. *Personality and Individual Differences*, 18, 57-62.
- Slee, T. P., & Rigby, K. (1993a). The relationship of Eysenck's personality factors and self-esteem to bully-victim behaviour in Australian schoolboys. *Personality and Individual Differences*, 14, 271-373.
- Slee, T. P., & Rigby, K. (1993b). Australian school children's self appraisal of interpersonal relations: The bullying experience. *Child Psychiatry and Human Development*, 23, 273-282.
- 菅野盾樹. (1986). いじめ＝＜学級＞の人間学. 東京：新曜社.
- 鈴木康平. (1995). 学校におけるいじめ, *教育心理年報*, 34, 132-142.
- 多賀幹子. (1997). いじめ克服法：アメリカとイギリスのとりくみ. 東京：青木書店.
- 詫摩武俊. (1995). いじめーのりこえるにはどうするかー東京：サイエンス社.
- Triandis, H. C., McCusker, C., & Hui, C. H. (1990). Multimethod probes of individualism and collectivism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 1006-1020.
- 矢部武. (1997). アメリカ発いじめ解決プログラム. 東京：実業之日本社.
- Yates, C., & Smith, P. K. (1989). Bullying in two English comprehensive schools. In E. Roland & E. Munthe (Eds.), *Bullying: An International Perspective*. London: David Fulton.